

漢

字

は

面白い

今月は

連・聯

「連合」「連盟」。これらの語は、「聯合」「聯盟」の表記もします。戦後、役人が「連」のみにせよと命じたため、現代人は「連合」と書きます。戦前の文書にあたることのある方の中には、「聯合」と書く事が正しいと述べる方もいらっしやいます。戦後の国語審議会による変更がいけないとも。

結論からいえば、どちらの表記も良い。意外にも、今回は国語審議会はそれほど無茶なことをしていません。珍しく。漢字の経過、意味合いの変遷をみていると、両方OKというのが筆者の考えです。

【聯】

「聯」の変化を図1に示します。

「聯」は甲骨文字時代から存在します。構造は、耳に絲。用例は、長雨（つらなつた雨、続く雨）、つらなつた玉器、つらなる、です。殷の時代から現代まで長く同じ意味が続いている字です。

途中で「絲」だった部分が、なぜか「糸」にかわりました。筆書きの見間違いかもしれない。秦、漢、北魏、唐、元、明の時代は「聯」「聯」の形で残っています。しかしなぜか『康熙字典』で「聯」となります。『康熙字典』は元々の「聯」を別字のように扱います。「聯」の音・意味はケイレンの「攀」の字と同じになっています。何が起きたのでしょうか。全くわかりません。

「聯」の字の成り立ちは、おどろおどろしい説や、爽やかな説があります。用例、証拠が少ないため、確証が得られていないというのが現状です。

おどろおどろしい説は次のようなものです。戦争で敵を仕留めた、捕虜にした人の耳を切ってつなげたという話。図1をみると、つなげたという割には耳が1つしか書かれていません。甲骨文字では糸にしろ人にしる、つなげる場合は複数描かれるのが常ですから、疑問が残る説です。

さわやかな説は、耳飾り。または物とみて、鼎などの器物の耳に紐とします。

おどろおどろしい説は日本でみられます。香港、台湾などは、耳飾りや器物の耳に紐と云います。

【聯の変化】

ところが時代がたつと、「聯」に新たなニュアンスが加わっています。筆者が調べても、いつ頃に新たなニュアンスが追加されたかはつきりしませんでした。用例から察するに、詩が高度に、複雑にルール化された時には、既に意味が加わっていたと考えられます。

「聯」に追加されたニュアンスは、熟語をみるとわかります。

「聯句」、詩の中の対になる部分。「対聯」、入口などの左右の柱に詩を分けて書いたもの、対になっている掛軸など。「聯璧」、対になった玉。「珠聯璧合」、日月星辰のように合わるさま。

このように、「合わさって一つの機能・働き・完成物をしめす」ようなニュアンスです。熟語をみると、「聯合」の方が良いという意見も納得できます。複数の物、国がよりあつまって、一つとして働く。好い感じがします。

もちろん続く、つらなるの熟語もあります。「聯句」、複数が次々と詩の部分をしてゆき一つの詩を作り上げる。「聯珠」、つらなつた珠。「聯綿」、長く切れずに続いてゆく。「聯聯」、絶えず長く続く・つらなる。殷の時代から存在する「つらなる」の意味が生きていますから、「連絡」を「聯絡」と書いても、「連鎖」を「聯鎖」と書いても良いとわかります。実際台湾のサイトでは「聯絡」の表記を見ます。

図1 聯

殷	周	戦国	秦	楷書	楷書
				聯聯	聯

【連の変化】

「連」の変化を図2に示します。初出は春秋時代のおわり頃。出現時から連なるの意味で使用されています。「聯」と完全に別の字。新旧の関係ではありません。

字のなりたちは、これもはつきりしません。車の列が続くとも、車を牽くさまとも云われます。列が続く説は、大名行列みたいな感覚ですね。同じような車や人が次々とやってきては通り過ぎる、そのような感じ

図2 連

春秋	戦国	秦	楷書
			連

覚でしょう。

この成り立ち説のニュアンスをみれば、「聯合」が良いとする意見もあります。その通りでしょう。

ところが。春秋晩期作だろうといわれる『能原鍾《はく》』という器には、なんと、「連」を「聯盟」の意味で使用しています。紀元前から実績ありという事実！戦後の国語審議会はそこまで考えてはいなかったでしょうが、偶然にも、国語審議会の指定がトンデモナイと言えないと証明されています。結果、「連合」「聯合」どちらもOKです。すると秦統一前の「合従連衡」、この語も「連」「聯（聯）」どちらも良しとわかります。漫才のネタではないですが、連衡策を言い出した本人が「連」を使ったか「聯」を使ったかを考えると夜も眠れなくなり……。無駄なことはやめてサッサと就寝することをおすすめします。

【おわりに】

このように、用例・熟語をみると、字のニュアンスや新たな面が発見できて楽しいです。漢字は、辞書の意味部分だけをみてもわからない世界がその先にあると感じられます。

それでは次回をお楽しみに。

~~~~~

これを書いた人

社会運勢学会認定講師 村上太佑

漢字の成立ちや用例を楽しむ「漢字は面白い講座」を毎月行っております！